

里見八犬傳 拾一編 卷十五

~13  
709  
63



門連 13  
 第 709  
 卷 03



明治三六年  
 十月九日  
 購求

南總里見八犬傳第九輯卷之十五

東都 曲亭主人編次

第一百八回 西國河原小南客北人小逢ふ

却説又那逆旅經紀人の取來る人を善哉翁の貌小盛を扇子と推啓して曾下を徐や  
 りふうち扇だや在りける程小既も没る日と見たりて遠く扇子と眞登と犢鼻禪小刺夾きて  
 找ま出恭しく衆人小うち向いて東西々々南北係て徳を辱辱しく光臨と賜ひぬ四方の君子  
 達皆一召れよ鳥許がうらひへとも小可の旅より旅の世渡るものまでいとも當所へ初度の見  
 参然も今日より賣買の用場ではいへも知せぬぬもよかるべしと扇子と拔出逆  
 て扇子と指示して是は建てる招牌にて崖畧の知り召れは小可家傳の膏菜の搦力の  
 扇祖と世も多野見宿祢の神方也撲傷折損損瘻小即效ある風塵埃と拂

八犬傳九輯卷之十五

文藝堂藏

ふより速く價の一盒永樂十文貯置せむ。怪我不慮瘡を醫を招き重宝此より宜し  
 死に。又只撲傷のまゝを癰疔癰を名の腫瘡瘡凍瘡刀瘡をも用れば亦妙に却賣  
 買の御愛敬也。此身弟子萩野下露と敵ひ小立し。搦力の多合を電覽小款するん小  
 可も其昔年壯きし時、搦力と好むゆゑ、既筋力衰へて、かかひあらず。像も  
 左も右も、侍ひん。暑も今、我年歳小似て、多々暮景小及ぶ。あつた月夜也。  
 天小一朶の雲も、おくれかきと、意死あざる。刀袷連ひる存在也。拙技と尙せ先や、搦刀の來  
 歴故実を聊演述仕らん。といつや、退じて、發兒小尻とち、櫛て、扇子と、竹笏、ち、咳に、抑  
 搦力の盪傷ひひり、垂仁天皇の即位七年當麻邑の勇悍士名と、蹶速と、吸做まある。その  
 筋力角を毀れ、鉤を伸へ、丹を擧ぐ、天下小一箇として、敵ひ多と、少え、六、天皇の美を、知  
 食、倭直の祖、高尾市と、勅使と、出雲國の剛力士、野見宿禰を、召上り。  
 隨即當麻蹶速と、搦力と、令して、獻覽あり、小野見宿禰、煨煉、を、替力も、蹶

今馬奴の  
 馬を置りて  
 不てよめと  
 最腹  
 相撲合腹  
 の大なるふ  
 るぞよふ  
 送り

和名タフ  
 積鼻禪の  
 サキ今俗の

速小捷りけん。蹶速竟小蹶小、され、脇骨骨踏折れて、叫びもあま死でけり。宿禰の  
 恩賞、蹶速が地を賜り。そ、依、皇都、古、置れ、朝廷、仕なりぬ。あ、その、采邑、の  
 腰折田と、吸做、を、村あり、その、蹶速、が、舊地、を、と、垂仁紀、小、載せ、れる、本文、小、據、推、量  
 る、當、時、の、搦、力、の、足、を、抗、て、相、蹶、る、と、旨、と、せ、り、あ、の、後、天、武、天、皇、の、十、一、年、秋、七、月、隼、人  
 来、朝、を、折、阿、多、隼、人、と、大、隅、隼、人、小、相、撲、と、令、ま、う、く、獻、覽、あり、大、隅、隼、人、勝、り、亦、天  
 武、紀、小、載、れ、る、是、よ、り、の、後、世、の、朝、廷、相、撲、の、節、會、と、稱、れ、ん、と、諸、國、の、力、士、と、召、ま、す、部  
 領、使、と、唱、へ、り、その、力、士、等、の、近、衛、小、隼、人、拔、萃、と、最、小、補、一、次、を、腋、小、助、小、  
 補、一、次、を、勝、れ、る、を、拔、き、と、最、の、相、撲、小、推、當、れ、最、小、大、隅、腋、小、入、脇、助、小、小、結  
 拔、き、ハ、即、横、綱、傳、受、の、傳、小、似、す、べ、く、欲、中、葉、小、至、り、て、最、後、小、執、る、と、侯、と、い、り、侯、と  
 所、云、ち、止、め、る、名、目、あり、あ、り、と、後、世、轉、して、大、隅、の、稱、呼、あり、昔、ハ、相、撲、人、を、分、つ、小、左  
 右、と、唱、へ、く、東、西、と、い、ふ、且、其、の、為、体、積、鼻、禪、の、下、衣、袴、を、着、く、劍、を、挿、し、立、合、小

あつたに  
綾足ぬき  
とす  
あつたに  
梅のフント  
かゝるの  
語るべし  
又梅の  
又梅の  
梅の  
梅の

折の尾を解き裸形不做事の今の相撲と異なり但し左右の為体各聊同く左の蒔花を挿頭と右の朝花を挿頭と花の即練剪左或は紐を帯加え或は袴を着ると著るとの差別ありその他法ヲ端々事ハ西宮記并小裏書江家次第并小裏書吏部王記北山抄等不悉今悉く出んはあ耳頼り思召れんあき只その崖略の但し昔の内取の後世の地合花相撲の如く左と左と命右と右と合まると召合の御覽の相撲又立合の後世の行司の度せりしめ指揮をその勝負を定る後世の因扇代古より近江志賀氏及吉田氏これを嘗る神代より名族も是も金銀の舊家と成り今に至るこの方の師表より又武家執制の世の平家世盛りの時伊豆園の人氏へは河津股野が角力の事ハ曾我物語に見れ世の人多くこれを知り又鎌倉の右幕下朝練の死時長居と喚做も相撲人も約莫園の八州小克者すと少くも頼朝卿の

所望依り秩父重忠が立合の長居の酷くうち負骨を折れて廢人のありぬ角力の折重忠の烏帽子水干極繕ひて長居と立合けり古今著聞集の載られぬ昔美人の御前角力の裸體のありぬと思ふ人もあるに至尊御覽の角力たりとも立合折の衣裳と着せその證文の上いへる如く當時重忠の為体の敵を微賤の者多れ故意衣裳と解きしるんあの一事で昔の角力の裸體のありぬと又古今著聞集中葉の相撲人の姓名多く見えぬその中の腹攪と喚做も名譽の相撲あり天窓と敵の腹の當て攪りて勝ぶといふとるけれがの緯跡とるんはさけるの時中納言伊実卿も角力と好みぬが父大臣伊通公を徵さん為腹攪と立合て勝負と試みぬ腹攪の伊実卿の四辻を合はれて頸骨も折る可引着られ攪んとする攪りぬ弱く虚俯の倒れぬ恥て逐電考といふ因に昔の摺紳の武弁るぬ殊更の相撲と好みぬれば其技ヲ修煉してみづも合はぬ



呼掛雨之遍那這とるくち繞りく。只願不請薦れども。感送巡を去りて。買んと者  
あるとるけれ上風望を失ひ。憶せ聲とゆり。霞下露閣ね。咱們當所へ初々  
来々。けふ生活の用もるれば。殊更骨を折る。衆人連を慰め。小人の山成。群集似似  
る。纒一。盒十文の膏茶。買入る。然れり。その情。閣ね。日暮。今  
宵の旅宿。さう。明日他郷へ走るべ。益る。死と。咳け。下露も。腹立。は。嘆口。氣  
多持。稍退んとせ。程。前より。衆人と。立難り。見。上風。が。為。体。を。似。而。非。技。を。  
と。感。思。ひ。親。兵。衛。懐。を。孝。嗣。の。目。を。注。り。找。と。出。く。あ。や。く。と。喚。近。け。我。も。前。より。這  
里。在。り。と。汝。連。が。技。藝。を。觀。る。小。相。撲。の。故。実。も。杜。撰。の。あ。ら。ば。立。合。も。亦。法。也。稱。び。老  
人。の。口。も。ぬ。る。修。煉。精。妙。嘗。ま。る。猶。あ。り。の。并。料。も。見。々。々。り。空。骨。折。り。只  
や。已。ん。我。の。膏。茶。と。皆。買。ん。む。什。麼。何。なる。の。價。を。と。問。て。上。風。笑。し。け。下。露。が  
答。と。も。も。遠。く。立。迎。へ。く。あ。る。辱。は。花。主。も。り。ま。け。り。今。日。携。り。膏。茶。百。盒。許

のいん價の永樂壹貫文也。事足るべく。必とも。然らざり。言はれ。御用も。あ。下。縦。一。盒  
召。り。と。も。百。十。數。入。る。這。内。中。も。一。個。の。花。主。と。思。ひ。な。れ。百。目。の。上。や。い。ん。下。露。一  
盒。買。入。る。と。を。親。兵。衛。の。あ。ら。む。否。と。よ。の。膏。茶。の。身。小。相。撲。の。あ。ら。む。否。と。問。て。人。御  
覽。の。相。撲。の。勝。者。の。纏。頭。の。平。民。も。亦。賞。錢。を。取。り。ま。す。と。俗。命。命。け。て。花。を。い  
る。の。膏。茶。の。左。ま。れ。右。ま。れ。和。主。が。技。藝。の。あ。ら。む。の。花。を。合。せ。ん。む。と。い。ふ。と。懐  
より。圓。金。一。枚。合。出。し。て。卒。と。せ。遞。與。き。上。風。の。呆。白。と。左。右。も。く。受。ま。る。又。意。外。の  
造化。の。小。可。一。儒。士。の。所。と。あり。士。の。已。と。知。る。者。の。為。の。死。女。の。已。と。知。る。者。の。為。の。死。と。知  
る。の。知。已。と。思。ひ。な。る。刀。袂。の。思。祝。と。云。云。と。推。辭。宣。言。の。倒。れ。人。を。知。る。者。の。似。て。反。て。金  
札。の。ひ。ん。を。れ。も。其。の。と。言。り。と。辭。ふ。と。親。兵。衛。推。辭。せ。し。ほ。る。の。東。西。の。口。誼。要。を。  
君子。の。断。金。の。交。り。路。上。の。人。も。知。音。と。思。へ。蓋。と。傾。け。故。昔。の。如。し。豈。白。頭。を。新  
る。浮。薄。の。交。り。慣。ん。と。上。風。推。辭。せ。且。感。下。且。欬。を。述。く。や。な。く。收。れ。下。露。も

亦飲びて金見か舞う膏菜をそ供會々親共衛不慮与えさせ程尚立禰方  
 衆人の内中一個の大漢あり忽地訛聲振發しかえちねのりありと喚聲めは  
 隊をさるれ土苞の身遠不近死と大家俱不訝して齊一見うる夕月夜不紛ふもあは  
 正に大漢の爲体面黒く眼圓鼻小鼻の低うきて左右不閉は唇厚くして髪髮再お  
 包れ月額延て春山の結縷草より猶敏糸く髮兵毛乱れて百足の蜈蚣と申す貫死  
 たる不異る身身は淡漆の榜の夾衣を被く片襖と叩く端折り白榜の積鼻禪の高  
 已時可きと前垂脩結做しく直木理の梧桐の下駄の小肉組の似くると穿裏い  
 腰裏緋の縮緬の圓格の細帯と右へ斜片結びて左の肩の算盤盤の口内とち  
 楸しと合直項の執ねて揺動は出る百魂酒氣又かかると人の鼻を穿らるる半醉半  
 醒人を物ともせりける地方実生の勢い好て怒り好争煩惱口舌の祟鬼なる内虫  
 蜀二國の城隍歎と思ひ怖る衆人の事いであらと詰めども見果たらんもさしがを立ちぬ

去らせそ存在り當下件の大漢の眼と睜り向臍蹶か上風から對ひ這取甚大胆之  
 若し誰が許可を受て這里出張々賣買をせりや約莫這漢父街頭を始て生活を  
 客商の必先咱們の縛を餽り或周折を送りて多うと後ハ生活をまゐら我まを  
 らぬ經紀見ふ錢賺とままもあむる故我始より衆人を敬言て若く膏菜を賣せざ  
 る那國の馬の骨やん牛の屎やん知らねども見も虫足ぬ似而非技金を取る鳥許  
 人ありそ并亦受る該はる快その金返さると嚼着像く罵ると上風吹て毫も控  
 まむ身と構うち向ひて開かひらとさる和玉地方の先使もあれ咱們の他郷の旅客  
 見るの知さる事何れ然人情人情ありとも錢を賺て後かたを欲する隨分贈りもせり然る  
 和玉外醋氣も人の禁を我膏菜を賣せりハ非道之况那方様の恩賜と和玉が差配  
 まるいさくひんと返せ死抑和玉何人ぞ問せも果て大漢のいさく聲と苛立り噫老老  
 奴が暗ら浅草寺の觀音といさく知る者ありとも誰か我名を知らん快垢合耳屎

撥擲して聽聞せよ武藏下総兩國河の西の岬畔に隠れる向水五十二天と喚做す  
 豪の我事親の時より任田河同流れて釣漁と生活ふ志事のみを聞諍の裁判色  
 情の受授一旦人の憑き事我撮合て成さるる。まじりて我下風立乾見乾弟を  
 斜りの量り箕をのり敷るも容易く量り盡さるる中も特勝れん枝獨結  
 素も吉と喚做さる我肉身の弟也船を馳ひ山を抜く旅力と誰ぞ知るぬ。約莫  
 坂東八箇國の関相撲を一勝も成さ合さるる。克くもわらわの口の本錢の没  
 らねば。いひた隨の長談義乞見相模の内合の寔は沙汰の涯に惚ゆるが朽惜ら  
 立合て我と勝負せ。快立とと飽まふ罵り哮る勢ひ。若れて枝獨結素も吉も羣  
 集の中より我と親兵衛より向いて阿待年少。現身の心は所は乞見相模の  
 一雨と金花用や酔興より這云只起り。金と復ると快ゆる。聞諍の側杖打  
 んどと諷を親兵衛冷笑してあるる。我も亦行人なれば地方の私法を知

とも我の我が盤纏も。這經紀の合も。和郎們の干る事あり。素も吉  
 守あむ。金の和主が盤纏でも地方の習俗を破りての祟と脱れぬ。敵も覚悟をせと敦  
 圍くと上風をへり喚禁め。各云品ありとも。その方さる觀場見。然も少年もの敵  
 へ。噂の天人氣を。鄙語のを理の前。道理の退く。自然の勢ひ。然る發憤の情由  
 あり。明日の他御へ走。下露東西皆拾け。旅宿へ罷。とられて。秋野下露も  
 立した腹も横も。招牌の干の。棋。抜合んとせ。程の五十二天。透き走り。腕を  
 抗て聲高。向の這奴も似。痴漢に乗。出の港。尻の帆揚。逃れ。那地へ逃  
 ん。是を咬へ。榮螺の似。握巻と振。抗て打んと。下露。と。捉禁。て。衝と。跟  
 入て掖組。素も吉。吐。嗟。と。掖。伴。と。背。も。我。も。上。風。推。隔。て。受。り。柱。を  
 相。挑。む。四。卷。の。山。風。の。品。出。根。の。藤。揺。め。た。小。枝。を。拂。ふ。異。る。上。風。の。年。老。れ。素。も。吉。よ  
 下。相。撲。の。修。煉。あり。下。露。も。亦。素。人。の。取。技。さ。力。剛。け。れ。五。十。二。天。と。素。も。吉。の。思。ひ。似





あまの湯  
三觀自昇小  
上風乱妨  
あまの湯

推着られて克と合と見物なれば、悦び雨聲ゆりまき、大家中と喚れ、群集の中、小立  
 雜りて、拳と握り、五十三太夫、火家の破落戸、二十四名咄と嘯、泣く、三十二、一、走、鬼  
 破竹の勢ひ、衆人、何と駭、怕まき、素破閉諍を、とまらぬ、あ、め、た、頼、れ、泣、き、只、蟬  
 子の、離と散ま、像く、往方、も、知、ま、る、り、け、り、介、程、の、破、落、戸、們、の、齊、一、五、三、太、素、の、吉、吉、を  
 幫助と、競ふ、法、の、突、戰、先、の、找、む、群、を、鬼、の、兩、個、の、敵、を、打、仆、さ、ん、と、喘、ま、上、風、下  
 露、の、撥、溜、々、々、を、避、く、ま、れ、走、迹、の、續、け、破、落、戸、們、の、招、牌、聲、兒、膏、蒸、ま、ま、で、打、推、に  
 河、放、下、し、て、連、り、狂、ま、中、の、素、の、吉、の、親、兵、衛、を、口、是、逆、旅、の、少、年、を、思、悔、の、聖、拘、り  
 懲、ら、し、て、頑、童、な、ま、名、と、火、急、の、情、態、兩、個、の、敵、を、多、勢、の、儘、と、五、三、太、夫、目、を、注、し、大、の  
 時、ま、で、も、自、若、と、し、考、嗣、と、共、侶、の、勝、負、誰、何、と、ち、目、成、り、る、親、兵、衛、の、近、つ、て、聲、を、も、被、  
 け、左、右、も、肱、腕、丁、と、拉、ど、推、倒、さ、ん、と、し、け、り、親、兵、衛、謙、を、振、解、に、左、右、の、捕、む、兩、個、の  
 項、髪、の、脚、を、一、度、の、棒、と、臑、と、拂、と、投、ぬ、五、三、太、夫、素、の、吉、の、い、ら、く、遙、放、下、さ、ま、ま、と、

何、來、と、落、り、け、り、當、下、親、兵、衛、聲、高、き、り、紅、丸、の、毎、我、名、と、知、ま、る、安、房、の、里、見、の、御、内、人、大、江  
 親、兵、衛、仁、ま、る、若、們、頑、固、非、道、の、真、罰、本、事、を、ぞ、威、懲、さ、し、其、首、を、退、之、と、罵、り、ま、く  
 群、中、中、面、も、振、ら、れ、走、り、鬼、の、勢、ひ、虎、の、手、と、馳、る、像、く、當、ふ、儘、と、打、倒、せ、り、考、嗣、も  
 亦、俱、不、找、と、敵、を、擇、ま、白、打、の、精、妙、組、と、け、投、け、投、伏、せ、り、四、方、不、當、る、這、那、兩、個、の、勇  
 士、の、幫助、上、風、下、露、替、力、始、十、倍、と、既、不、怯、れ、破、落、戸、們、を、撥、抓、を、打、倒、走、劇、に、四  
 個、の、棒、を、誰、う、一、人、も、味、ま、さ、せ、く、と、ま、ら、ぬ、逃、水、を、或、陽、談、の、命、を、幸、く、免、れ、て、一、人、も、あ  
 ら、ま、り、介、程、の、五、三、太、素、の、吉、の、親、兵、衛、が、鬼、神、を、欺、く、勇、力、武、藝、不、酷、く、懲、り、て、左  
 右、も、水、際、の、四、池、も、着、流、の、儘、と、西、町、川、下、より、逃、り、け、り、然、ら、ば、又、上、風、下、露、の、走、る、破  
 落、戸、們、を、軒、棄、て、舊、の、外、か、り、ま、り、恭、く、親、兵、衛、を、朝、の、地、上、の、跪、居、て、上、風、が、先、と  
 け、ま、る、是、不、慮、の、災、厄、を、敵、を、多、勢、の、儘、と、脱、れ、り、と、思、ひ、ひ、り、脚、兩、君、の、脚、助、力、を、  
 事、を、平、た、り、飲、む、短、辭、の、盡、ま、り、も、い、ら、ぬ、然、ら、ば、君、が、大、力、を、頭、立、る、兩、個、の、女、八、五、三、太

素吉とやうと左右小受て投懲りぬ折名告せぬふも肇て知りぬ和君の安房の里  
 見殿の御内人大江某主と在ると思へ不審なるも因て尋まんと欲し和  
 君の備大田小文吾大川甚介と喚做する兩個の勇士と豫より知られぬと問はる  
 親兵衛うち領る然る大田氏の我外小父お七大川も亦我與同因果の義兄弟甚  
 八犬士一人之原米大田と大川氏を相識る和主の越後なる小千谷の御の運旅主人なり  
 家跡の慥石亀屋次因大叟の申名と問はるる呆るも眼も暗り顔も長  
 観て什麼いふし我実名と申す猜しぬけ音也々と嘆唱し憶を側を分  
 元下露も亦訝りて面と注し猶左右あるも思ひける當下上風の次因太と  
 又親兵衛うち朝ひて這里不待る後生の小可が相撲の弟子なり実の名は百堀鯉三  
 と喚做する心術老実かく機密と洩さるもあはれぬ意も老あて就て不審も  
 去歳の夏大田主の我宿所小淹留の程眼病の折をとり特更ぬ身之事と云云

といひぬうち不娛ぬをゆ知ぬ小涯の刀袷大江和子の當時七八才をりの穉児  
 あり。小の時神小躰され往方知ぎよるす小目今和君を見なれ十七八の少年なり  
 武藝力量凡夫あり。備別小少筋の御舎弟のいと問へ親兵衛合矢と疑  
 惑のその以るたわも酒家年四才の秋必死の火泥あり。折過世の母と下まは伏  
 姫神の冥助よりの恙さるりのとまそれより七今茲も六松安房の富山に在  
 てぞろろ如く身長き心術さ大人備へ仙境餌茶の故も然神女示教あり  
 我七大士の上のゆえ叟のゆき粗歩知りて逆らるとゆるるもあて叟の不測の  
 穴窮厄あり。片貝越後國の獄舎小敷糸れとの春正月某の日の未見の由縁の帮  
 助よりの免るる死すも皆是神女示教せられ知るるとゆるるも我も亦故の  
 近曾出世と許され姑且國主仕へ小後の事と知るも知るるの尋問へべく  
 猶我も詳の解示さる思へも這里も秘密を談ととらひ孝嗣をえと



るも中りしが、次園太平信半疑し、哀歡あつて判りもなき。心許ると思ふのころ、  
 果へ其身も井小隊なる。鈍小似ら。端々人揚られ、見るを。卿二がうち歎たていさ  
 柱土へ起れ、便りお就く誘へ。救多野因ある飲と。今茲正日の中旬より。獨情  
 地小東路小杖と受り湯嶋多。天満宮詣り折茶を齧り坐敷師の物四郎と喚  
 做そ才子小値遇しと料を補助と給り折る扇谷家の夫人蟹目前那神社へ詰  
 る。物四郎の愁訴ある。次園太が助命の願いを立地小許容あり伴當妻有  
 復六を火急の使立立させ。越路へ遣り。卿二も開が後小跟。俱小越後へ  
 還りけり。却是またの豫より。看官美知のさる。その線小助と援るの。小程小籠  
 大刀自へ息女連言多。中那殊小鍾愛深るけり。蟹目前の東園より。次園太を赦免し  
 懇望神の示現の。消息町寧まりけれども。そと非とる不疑か。速小因心  
 救の沙汰あり。小絶小隔一日。麻立て扇谷家の刃心園の別館より。亦復火急の注

進あり。則是別義小あり。正月二十一日。蟹目前前那河鯉守如の故あり。自  
 殺の事又那權臣縁連の物四郎の大坂毛野の鈴茂林ゆ。轍果され。事又毛  
 野助劍を大田大川の武勇の事又徳々の義あり。管領家も那茂林邊也  
 豊島の残黨大山道節并大飼大村の龍襲伐れ敗北して。高畷を危小躬の折  
 河鯉孝嗣が敵と柱て主君と拯ひなり。事又五十子の城の折。大塚信乃小  
 火攻せられ。一旦落城をれども。大士の城小據ら。退散する事又管領定  
 正主の辛おて虎口へ脱れて。忍岡の城小在る事。且河鯉父子の忠誠此小至。虎  
 か。蟹目前守如の夏修聞の錯誤也。惴り。自殺及びいかも。毫も越度る。一  
 とも。管領筆で感悟あり。先非と後悔の支ま。漸々告ぐ。那地の急使片見へ  
 着到三番。及び。腹大刀自駭た。且その歎た。大々。恥て由元。召よ  
 せ。愾然として宣ふ。身日蟹目自殺の事。那身小行。り。一。管領悟

せのいさそを切てのりさからるは討し大坂毛野助劍考とせえたる大田小文吾  
大川莊介們がさの一件の兩個の懸心見り去歲の六月誅戮せし石濱大塚兩所の  
使者馬加御武丁田豐実們的渡遣しけり件の御武豐実も歸東の途お  
命を喪ひ小文吾莊介が首級を齎し真偽詳らねる額藏の莊介が所持する  
兩刀の落葉小條ありされ首級も小文吾莊介と姓名同し別人ありと平葉大石  
兩家より意見を廣て那兩刀を返されあり今も思へ去年這里を誅し必同  
名異人あり這回毛野助劍の考えある兩人を實の小文吾莊介を然るゆへ大坂毛  
野胤智の跡中並能及の猛者去歲の六月信濃路を御武豐実と數果せし他が  
所為るんといふ者あり今茲武藏の湯島を解目前の内意を依りし河鯉權佐  
守如相譚れて他が父の仇とせし龍山縁連們を討捕する事情も今又思へ現人  
ありわらざるあり是れより再思ふも量るも毛野助劍殺れる千葉の權臣馬加常武及額

藏の莊介們の友幾名を殺れり大石氏の陣番丁田町進并小卒川庵八郎軍  
木五倍二賊上宮六們が奸詐せ舊惡修り死後不噴せざるの乃者多く證  
据もあれし王と石とを分別ありあつ初憎し思ひ額藏の莊介も又大田小文吾もあつた  
祟る者あり但他們の豐嶋の殘黨大山道節が我兄弟也俱謀りて管領家  
危うせし恨むべし其の怨と何と思つやと問れて由元何とせし謹て答ふるまを自取有  
かたきも辱し脚意と乘りひのりる實に賢查あるが去年誅戮せし那莊介と小  
文吾の折も稟上し小錯を必同名異人せ這回毛野助劍考も直の莊介小文吾  
あり今も疑ひるが人情人情をいふは他們の豐嶋の殘黨大山道節が荷  
擔する管領家と違ひなり且信乃が火攻する五十子の城の聚合し憎む家似たり  
亦公道をいふ人各忠義の與也他們の都て義士され那常武縁連們と目と同一  
を論ぶべくもいふを教するも痛く惜しむる月と惜しむ鮮虫目御前の御落命今も



并美田駒蘭二門件の船虫媪内首と斬らまて高嶽邊へ並島来たの佳れ  
 石龜屋次團太の憐むべし冤屈の罪也他が屢陳さすよと這那既の咄合せり矧又蟹目  
 御前の湯嶋の神の示現小より過分くも次團太の命乞と做されしその見答と那許  
 仰遣さる餘日ありて及て凶變の報ありしに恐れさる當所の賞罰神佛の真慮小稱  
 罪罪民を苦めぬ心報ふりあらんぞと情地小議をもゆいむと次團太と赦免  
 あく解由目御前の見與申定は優る御追薦あるべしと證と援は道理と演と居  
 諫言濃きければ然し雄々志は服大刀自胸の張り弓稍弛と並前竹心の直る本性  
 思ひ返志し忍辱の鎧あわぬ衣の袖も落る涙を堰留難て現愆りあやまち恥しや七  
 旬小程遠くぬ老が身へ鮮虫目の貞実賢才不及さる今やなぐ思ひ合せる思魚目よ  
 卒らぬ次團太と今日速に赦免ま下然れども他が木天蓼丸久く宿野の藏め措く  
 訴さる越度への罪われ封内にあること許さる但追放せし律稱ん這我を

具から渡しぬ疾々せよとゆえに由死に這憲彰と愛びて言兼あり候のおと  
 幼ひける尾毛の機密と次團太が知るをさるるし追放の折稲戸の若黨并秋野井三  
 郎が次團太の其見せしと鮮虫御前の御仁慈と片貝殿の御性直とあつらふ與知まる  
 故が身取取て過分ははる秘密の情申あれ生涯御恩と忘るる勿論御法度と畏  
 とて當國より願居りし七倘再犯の罪中その度へ赦されり秘よあを思ひな稲  
 戸主の内意とを言前條及び次團太所々駭嘆と感涙の找む覚まその飲むを  
 述る向もる雜兵追立られてゆく約莫二里許杖杖を地方也檢護の雜兵を立別れ  
 片貝へなり去りけり小程百堀廻る片貝の沙汰とぞ知ると茶店小總と見  
 在る雜兵們のかりゆく程を走りゆく次團太を迎て飲むを茶店小總と携着る衣見  
 と腋持の刀を渡與へ準備の食筒と啓て丁寧薦る程却湯嶋をあり  
 の料も那坐敷師物四郎の帮助ゆる首尾と告知され次團太亦萩野井三郎の



きひみつ さやまめ ありさう まいる 大田大川の義兄弟大阪野嵐智との  
 听秘密を耳に示してその物四郎と喚做る大田大川の義兄弟大阪野嵐智との  
 勇まきりし石濱信濃路兩所の血戦往日又武藏の鈴茂林にて復讐の事をもその  
 上の徳をもとめて隨分解知すれぬ天く胆と潰して原來我恩人大田大川宿因  
 ある大士の隊をいさよけ今を思ひ合ふ然る縁も頼めども最做りては技藝を  
 りく解目御前の愛を秘候と捉賞代てお身を頼く救れんやとてくもくもく良縁  
 奇遇と感嘆もその秋公跡に亦憎むべし土丈二阿嫂と為休箇様々ふいそ奸淫  
 不軌の顛末も其其に報あふ次園大听思も我もさく大阪王の妙術不測の智  
 助とて解目御前の仁恕不遇を土丈二嗚呼善評られて獄裏の鬼とある今幸  
 いふ窮鳥の籠中とて棲も目もあふ做もさく阿容々々と三城門を那依在せる大丈  
 夫とあふる要をあれと尋思とさく曾の秘密と解二も其に示其一謀及至その義  
 心志もあふ巴も既その意あり情地小千谷さうして共侶の本意と遂に入那堂へ到

らば箇様々々々との進退を定る解二も一刀と帯て来ぬれ事足たり脱落をさせと情  
 語多謀合してその曉昏小身装束の遠く件の茶店と立去りて鳥夜を便り小間  
 道より連り路次と急ぐ小千谷と片貝の間で千々二囀と喚做る一條路を來お  
 ける夜は三更の過さるけり時急早一と思おも路傍守る人存る野猪菰屋あれ  
 立寄りて解二と共侶の夜の深るも程忽地小千谷のさうして伴當張燈を兼  
 ちて這方へ来る者あり又片貝の方より張燈引提て只一個這方と臨て來ぬ所あり這那  
 俱野猪菰屋の邊を邁遭ひを他が張燈の火光が就て相れ紛々もあふ小千  
 谷のさうして來ぬる次園太が妻嗚呼善評伴當解二と喚做る食客又片貝のか  
 よりかへ來ぬる奸夫土丈二さうけれ送ぬる張燈の花舞ふと猜し嗚呼善先聲を  
 被て登り王孫何ぞ遅かり御高里長故老達らち連てかへ來ぬる身單ハ送されり  
 此の遅速の料りかるとして胸の休らまきて見居て不婚て目暮され顔え

ね。思ひ難々。腕八刀袖を俱し。迎ふ出候。と。原上丈二も。馳て近死立住りて。そ亦要る。死  
支さる。知らざる。今日亭午より。猛可片貝の御館へ召されて。まると。約莫一响有餘。さ  
や仰せされ。東路の。木天蓼。九の盗賊。東路を司馬濱の道邊に在り。小  
這回。罪發覚れ。那地を。鳥首せられ。任れ。素より。次園太。那盗賊。あはれ。と。さ  
木天蓼の。短刀。久く。家小。藏め。措て。許稟。さ。越度。あり。故。那身。追放。せ。ほ  
衆比。皆。の。罪。を。あ。ら。る。但。士。丈。二。乃。御。用。れ。る。姑。且。等。は。れ。の。餘。の。退。り。と。さ  
身の。暇。も。賜。ひ。不。我。の。三。單。送。され。後。寛。僧。都。の。心。地。へ。あ。れ。罪。あ。ら。も。覚。え。却。程。不  
ま。つ。不。下。下。時。候。再。局。へ。召。せ。り。有。司。達。宣。ひ。若。は。異。衣。次。園。太。木。天。蓼  
九の。盗。賊。と。して。正。可。許。稟。去。り。次。園。太。の。那。盗。賊。を。任。れ。若。も。疎。忽。の。罪。あり。信。と。仰  
付。り。格。別。の。御。仁。恕。の。今。番。御。沙。汰。不。及。れ。辱。し。思。ひ。な。り。後。と。怕。と。慎。む  
べ。退。り。方。ね。と。叱。ら。れ。て。ち。か。年。季。果。れ。も。脾。性。の。小。腹。も。空。城。下。の。酒。肆。へ。立。寄。て

氣附其の諸百の利方を。五六合。塞が。曾と。忽地。御用。細魚の。塩加。減を。又。あり。物。か。し。く  
夜食。一。碗。又。一。碗。飲。食。ひ。せ。程。の。憶。ぎ。も。日。と。消。し。り。と。の。鳴。呼。善。い。ち。又。以。て。然。る  
や。好。れ。の。事。を。と。と。怒。り。思。ひ。過。の。せ。れ。る。將。有。の。折。の。准。備。も。那。這。と。さ。く  
榜。衰。め。十。兩。金。の。懐。斂。め。來。り。夜。行。は。れ。是。を。胸。の。安。く。ぬ。い。と。さ。り。今。這  
里。より。男。子。二。名。お。俱。せ。る。後。安。く。は。れ。今。ち。う。後。安。く。ぬ。那。人。の。氣。か。薄。情。な。那  
短。刀。の。盗。見。か。東。園。で。招。う。せ。は。ゆ。ゆ。思。ひ。の。隨。ふ。る。り。非。如。追。放。せ。る。も。命。の。恙  
も。在。ら。ず。寐。寐。安。ら。ぬ。か。と。と。士。丈。二。の。更。を。开。ゆ。亦。念。の。過。る。追。放。せ。れ。罪  
人。が。倘。當。國。の。願。居。ら。し。又。許。て。結。果。ん。然。る。の。の。を。知。り。那。人。が。あ。れ。下。の。封。疆。と。立  
去。て。い。か。の。來。る。日。の。あ。ら。ぬ。と。い。の。腕。八。然。と。心。張。燈。卸。く。邊。小。蟬。燭。の。真。の。撮。り。粟  
寔。お。哥。々。の。音。簡。妙。々。の。噂。お。耳。引。立。て。願。居。る。と。安。知。ふ。そ。亦。没。怪。の。幸。い。許。稟。さ。ら  
擲。捕。身。其。度。殺。れ。ん。備。又。遠。く。立。去。る。跡。勅。の。世。を。か。る。月。を。一。その。氣。で。あ。る。死。の。が。と。

のれて嗚呼善也。士丈二も憶るを俱あもあはひて。鈍りか。何事を宿所へ還りて實に。
 とわらわ。この途中小立聚合して長商議を人あて。知られぬ事何せん卒。
 との程小風音あ。猛雨投石の像。降る。け。男女二個の。人。敬。
 見。頭者。の日。和。癖。降。も。異。斑。點。在。る。姑。且。必。要。存。ん。
 袖を挿頭て見れば。向。野。猪。菰。屋。あり。一。時。那。里。立。取。聚。合。
 濡。を。登。り。と。信。走。り。飛。が。似。る。路。傍。菰。屋。今。宵。の。所。と。知。
 佛の座五行。鷲。腸。某。跡。躰。られ。七。草。足。及。路。傍。存。一。雨。と。避。
 へ。赴。く。中。途。也。料。も。士。丈。二。嗚。呼。善。が。腕。八。と。共。侶。
 且。那。奴。們。が。所。と。所。果。て。と。下。さ。り。と。深。念。と。足。場。と。量。
 潜。り。る。の。動。静。を。規。程。俄。然。と。降。驟。雨。の。慌。る。嗚。呼。善。

争ふて入る。欲。野。猪。小。屋。も。次。圍。太。り。又。出。ん。と。送。の。勢。
 と。撞。中。の。男。女。兩。個。の。胸。前。を。左。右。手。と。引。扱。て。怒。り。
 と。名。を。れ。次。圍。太。る。を。覚。期。を。せ。と。吐。嗟。と。駭。怕。も。嗚。呼。善。
 と。名。を。り。猿。馬。を。飛。り。振。放。さ。し。角。ひ。を。次。圍。太。緩。
 士。丈。二。還。ふ。筋。手。り。水。甲。の。畔。へ。倒。れ。り。次。圍。太。の。
 呼。善。右。の。肩。尖。を。斬。り。て。苦。と。叫。ぶ。果。を。颯。と。潰。る。鮮。血。
 倦。り。一。程。お。籠。ら。し。士。丈。二。跡。お。續。け。て。走。り。入。り。今。
 潰。り。胡。諺。で。張。燈。其。果。も。ち。棄。て。足。お。信。と。逃。走。と。
 と。吸。り。く。近。く。儘。お。腋。挿。の。刀。を。見。り。と。引。扱。て。
 寄。せ。て。四。も。耳。り。引。組。ん。で。積。倒。し。と。を。掩。り。け。る。



次園太

八代傳九郎卷十五

十九

大谷玄三



慎之慎  
之出於  
汝返於  
汝者也

八代傳九郎卷十五

大谷玄三



先らるる若き情願然もあましく思ふも推登と後妻も做して世帯と當りし又土丈二の我  
 所親の孤兒でありけり總角の比より我乾兒として相撲の技を教導り京鎌倉の勸進  
 相撲の名を載りしまでありし抑是誰の庇も有徳の素より君們的庸常の妻ありし  
 渡世の奥の弟子ありぬ恩義を忘れて密通するその罪鏡にかけられも然らるる世  
 間の似る慈見あるあはれ男女ひらく追ひて地方の住む林のあはれ若們不義の情  
 慾飽く我身と推整し世帯と奪畧んとて事と計較を誣訴し冤枉の罪に陥し  
 たるその悪越の極より猶これをも忍ぶぐの執事を忍ぶるべしとて皇天若土も這許  
 逆の賊男女と容れぬも眞罰踵と旋と目今我の屠る悪報を思ふも甚  
 ぞと罵り責む那這とく刃頭とく突けが苦む土丈二嗚呼善の饒ぬらふ聲  
 も霜夜の虫も異るも繞るも脚を動し息絶々呻吟と次圍大然とて冷笑  
 しく若們今けり免れぬ命と惜むの愚魯なる念佛も直と刃と抗り土丈

二胸前馬銃と刺串は下布れ嗚呼善まで串れる四幼八苦の両と握り眼を  
 睜りて共侶の息絶けり既にして次圍太も血刀と抜合り杖と斂め斂め斂め八  
 が仆俯し身邊も我と迫りて足と頭顱と踏動し我敢見も死を若塚之  
 山の小經紀駝牡ハが獨子なりとさく相撲と好むとて我弟子ありし近曾若が  
 二親の世と去りし生活も親も産と破り邑と追れて宿宿する者ありし我と  
 師弟の義を思ふ宿所も喚合なり意見を示し人做んと東西に没れて去歳の  
 秋より養ひ小素より不実の本性れ因思と思ひゆかりも只その同氣相求め同  
 悪と相憐む土丈二の相譚れ嗚呼善折々餌を飼れ非美の利慾不惑ひけ土丈  
 二が詭詐の折若の他が證人做り巧我を誣するその婢の趣に我身獄舎に在り目  
 人憐るるぞ知ら然今招ねども若も嗚呼善俱せられて命を贈らば云と云る則  
 是天罰也怨る処るべし観念せよと罵りて項を緊く蹂躪し云と云るは

てあし張る。脆くも呼吸の絶え。當下次園太の側を急ふさう。喃卿は這奴の  
和郎の脳骨を摧れ。始より痛く弱りけん休まら。其の終十々威を刺さむ。又生  
くづもあ。善か。嚮ふ嗚呼善が土丈二の告ると。我知ら。他が屍骸の懐必金十  
両わらん。亦都々我東西を合ると。天道鏡のらん。開を盤纏ふ。他郷へ走  
らん。探りてわ。快か。ね。の。卿。三。所。そ。勿。論。の。り。さ。う。這。里。より。小。千。谷。へ。速。く  
を。件。の。金。と。先。合。て。情。地。不。宿。所。立。る。有。ん。涯。の。錢。財。と。攫。て。走。ふ。身。の。所。因。を  
求。る。折。の。本。錢。は。あ。ん。只。這。奴。を。屠。す。は。せ。を。空。う。さ。う。と。い。ふ。次。園。太。頭。を。掉。て  
そ。亦。和。郎。の。ま。さ。さ。然。で。飽。く。し。知。る。小。千。谷。の。宿。所。我。宅。あり。那。里。の。東。西。と  
我。有。ん。も。既。罪。と。蒙。り。追。放。せ。れ。我。身。を。我。東。西。と。我。有。ん。も。然。さ。う。も。さ。う  
か。り。來。て。女。婦。又。淫。婦。と。怨。復。し。屍。骸。不。送。れる。十。兩。の。金。と。合。る。危。死。の。為。お。已。工。を  
ゆる。所。為。さ。不。慾。と。拵。強。人。と。五。十。步。百。步。の。間。の。三。天。道。鏡。も。さ。う。は。這。里。の。片。貝

街頭を夜の暖み人迹絶。知れざる。幸い。快く影を躲せ。と。余。卿。三。有。理。と  
悟りて。嗚呼。善。が。屍。骸。と。探。る。項。不。掛。る。財。囊。の。内。果。し。七。十。兩。許。の。金。あり  
あ。ん。も。合。さ。う。次。園。太。の。邊。與。せ。さ。も。さ。う。懷。敏。め。く。四。下。と。見。返。り。さ。う。は。れ。卿。三。且  
田。の。人。と。辞。讓。も。有。敷。系。礼。あり。儀。あり。心。を。さ。う。人。の。道。俱。は。速。ぬ。野。十。玉。の。鳥。夜。の。潜。ぶ。便  
さ。う。死。路。と。求。め。く。通。宵。震。く。も。走。り。け。り。却。説。を。明。の。朝。開。け。近。地。地方。の。住。客。が。嗚。呼  
善。王。丈。二。の。横。死。を。見。出。し。て。う。ら。散。馬。は。多。村。長。の。告。が。殺。れ。て。時。既。半。幾。う  
程。り。けん。敵。と。知。る。死。照。驗。を。け。れ。隨。即。事。の。趣。を。片。貝。の。有。司。に。訴。ぐ。実。檢。使。を。京。王  
の。跡。と。詮。或。と。迷。れ。誰。が。所。為。と。知。ら。う。は。れ。嗚。呼。善。們。三。個。の。亡。骸。は。由。縁。の。者  
令。措。く。べ。し。居。宅。家。伏。の。没。官。せ。れ。て。石。龜。屋。の。迹。断。絶。今。番。購。ゆる。者。の。家。を。住  
替。り。け。り。然。る。嗚。呼。善。王。丈。二。の。殺。者。の。次。園。太。が。怨。の。堪。ぬ。所。約。中。と。あり。め。と。猜。と  
い。者。ヨ。ウ。ウ。の。風。聲。片。貝。へ。吹。え。さ。う。も。稻。戸。由。元。の。有。司。の。豫。より。土。丈。二。嗚。呼。善。が

ふぎふての。新を憎く思ひて反て次園太と憐れ。事の疑ひありといふも。今も次園太の  
不義不貞の。新を憎く思ひて反て次園太と憐れ。事の疑ひありといふも。今も次園太の  
往方と涉獵り追捕へ。紅明せんといふ沙汰の。鳴呼善士丈二腕八們が。與家素  
んと欲するの。もむとみれば。他が。海濱竹逆の。里人夜話。未たりと。みん程歴て。灰  
えける。同話。休題。余程。次園太の。卿を従へ。書具。願て。夜を宗と。走。信濃上野  
武藏。まの。肩谷家の。封内。長尾家の。所領。ゆまれば。然。其方。赴。去。向。の。追捕  
心許す。且。陸奥へ。赴。姑。且。那。地。且。弥。り。支。の。定。り。た。ん。時。候。我。投。方。向。く。べ。れ。と。  
よの。春。二。月。中。旬。及。び。て。奥。の。會。津。に。來。り。れ。客。店。に。留。り。て。卿。と。商。議。去。後。俱。不  
久。後。の。と。謀。る。路。費。に。十。兩。金。を。卿。も。貯。禄。の。長。尾。旅。宿。を。せ。べ。も。あ  
む。然。路。費。の。竭。る。以。前。此。の。旅。行。經。紀。と。も。日。毎。小。錢。を。給。ふ。あ。る。進。退  
其。里。分。り。後。せ。ぬ。却。何。を。賣。る。と。更。思。念。と。旋。る。ま。次。園。太  
師。傳。の。膏。某。の。横。傷。折。損。の。奇。方。あり。折。入。の。施。け。不。經。驗。あ。る。と。い。ふ。と。某。材

も亦。輒。け。れ。身。の。旅。舎。不。存。き。件。の。某。の。制。作。者。卿。三。の。賣。ある。が。次。園。太。の  
笠。と。深。く。あ。り。日。毎。小。會。津。の。巷。街。を。呼。ら。徧。歴。り。て。賣。り。欲。せ。か。も。人。の。某。の  
可。不。と。い。ま。知。る。あ。ら。れ。ば。そ。の。買。者。の。稀。し。て。日。の。房。錢。不。足。る。も。あ。る。左。右。は。左  
程。小。と。春。と。憂。り。旅。宿。の。銷。し。て。三。月。下。旬。の。如。命。の。綱。と。思。ひ。十。金。の。路。費。の  
過。半。竭。る。残。り。寡。く。隨。次。園。太。情。思。を。曩。の。故。御。を。追。れ。よ。と。も。五。十。日。の  
光。陰。と。麻。生。の。縦。追。捕。の。沙。汰。あり。と。も。今。大。際。實。を。盤。纏。匿。く。ら。け。る。不。意  
よ。の。地。方。小。日。と。過。さ。し。馬。を。あ。ん。ぎ。ん。い。で。武。藏。へ。赴。り。湯。嶋。の。天。滿。宮。詣。て。解。厄。神  
恩。の。賽。願。と。致。き。兼。て。大。阪。犬。田。犬。川。那。三。大。寺。在。処。と。索。ね。て。再。生。の。恩。值。遇。の。縁  
その。欽。び。を。い。ふ。も。あ。ら。始。り。と。終。り。恩。と。思。ひ。者。の。似。たり。と。思。思。と。卿。三。の。徳。々。と  
説。示。す。卿。三。所。異。議。も。あ。る。所。へ。と。心。然。然。去。向。を。急。ん。と。其。の。詰。朝。會。津。の  
里。の。歇。店。と。俱。立。去。り。日。小。歩。夜。小。宿。り。武。藏。の。豊。嶋。郡。小。來。り。湯。嶋。の



神社と拜とまうり。卿と共侶不黙禱不時の移るも覚む。あの日の拜殿も通夜を。猶  
久後の真助と祈る。恩人物四郎の大阪生並。大田大川の両勇士。環會一のひねとく。  
思ふ涯を祈請。まうり。更不去向。思慮る。下總の杉徳。小文五。口甘。信里。藤。夢。知  
正た。られ。那。里。へ。尋。問。る。在。外。を。知。る。や。わ。ん。飲。と。そ。の。早。卿。三。不。意。衷。と。示。し。共  
侶。の。杉。徳。へ。赴。せ。り。里。人。們。は。問。試。し。件。の。大。田。小。文。吾。の。猛。可。不。當。所。を。立。去。り。し。の。今。も  
六。稔。の。り。や。る。べ。く。ん。親。文。五。兵。衛。の。故。あり。て。安。房。へ。い。き。れ。り。那。地。也。身。故。り。され。が。家。の  
絶。た。小。文。吾。哥。々。の。い。ふ。ま。り。は。早。裏。小。一。び。か。の。來。ぬ。れ。と。し。か。虚。談。と。ん。と。の。人。の。答。不  
便。り。と。い。は。れ。ば。次。圖。太。望。と。失。ひ。し。又。卿。三。と。共。侶。の。下。總。武。藏。の。封。疆。河。多。西。の。渡。村  
ま。で。か。ら。來。ぬ。け。り。路。費。の。竟。不。使。果。し。て。絶。ふ。一。日。飲。二。日。許。支。る。ま。を。ふ。り。か。ど。御。當  
奥。の。會。津。也。賣。と。信。殘。り。膏。茶。の。百。盒。餘。り。あ。り。這。頭。で。これ。を。賣。盡。す。本。錢。を  
失。余。至。り。む。是。より。日。毎。の。房。錢。を。以。ち。べ。り。然。り。け。れ。も。先。度。の。ど。く。只。呼。ぶ。く。の。ま。あ。く。々

今番も買入稀多一人の心と樂ま。遊藝多しと施ま。衆人取合ふべれども然も筋  
の素より疎本性るも争何せん。只年来嗜む技の相撲の外あべくもあはれ。所詮  
老と忘れ羞と忍びて箇様々の鳥許技とせ。看官極めて言ふ。然りとて。膏茶の  
あつぐ。賣れざらんや。と。師弟當晩の歇店を。情地。高量。あれども。招牌。を。の。准。備  
あれ。詰。朝。も。亦。その。事。の。這。那。と。く。時。を。殺。し。て。既。未。牌。下。刻。より。之。觀。鼻。不。立。出。て。稽。首  
古。相。撲。の。技。を。り。人。脚。を。留。め。立。取。合。し。て。專。膏。茶。を。售。す。甘。不。禍。鬼。忽。地。其。首。の  
起。り。一。旦。難。義。不。及。び。小。料。も。親。兵。衛。と。孝。嗣。の。助。力。甘。れ。て。事。の。あ。及。び。あ。り。然。と。石  
龜。屋。次。圖。太。の。這。來。路。の。長。談。脩。話。と。卿。三。と。迭。代。小。解。と。詳。り。け。れ。孝。嗣。も。耳。成  
傾。け。我。身。も。似。る。冤。屈。の。罪。科。他。が。奇。遇。の。湯。嶋。の。神。の。真。助。と。思。ひ。け。り。登。時  
大江親兵衛の次圖太。ふち。向。ひ。て。適。愛。の。使。命。運。九。死。と。出。て。一。生。と。い。は。れ。洪。福。の。を。り  
む。淫。奔。の。後。妻。不。義。の。乾。兒。不。怨。と。復。し。て。天。罰。を。示。し。一。は。く。ぬ。と。死。大。丈。夫。の。所。約。と

併卿之師恩と思ひ義不仕と。水火裏に艱難と俱に考ふるは是亦易  
し。弟予る如斯此就て今又思ふに只大阪毛野子救れりとの人傳ふ事  
知り。信乃道節莊介小文吾現八大角の六犬士の料を豊の帮助ありと人告  
其知るべし。と云々次因太訝り。そ亦甚る故に。と問へ親兵衛然と。豊小豊を  
命乞の事鮮目前の仁怒。船大刀自の尚疑ふ。速更饒難。那賊婦船  
虫。奸夫媼内と俱に司馬濱。牛の角の突殺され。并が昔年来の積悪成  
寫してあり。木天蓼丸と偷合。事さ具るけり。と稲戸津衛由元が知り。と  
隨御船大刀自。上と諫め。大刀自言下。小感悟。時を程。忍赦の沙汰。是  
豊が獄舎。坐され。這一椿事。よめて。去る。船虫媼内。牛の突。て誅戮。まける。是  
神佛の所。祈る。その夜。文船虫。大田。撞見。て生拘。れ。又媼内。道節。信乃。不投  
伏。れて。俘囚。なる。ぬ。折々。莊介。現。八大角。皆。その。濱邊。取。合。ま。六犬士。相謀。ひ。

賊僕賊婦を誅す。申夜。媼内。竊合。る。赤鬼。四郎。の。牛。の。角。と。壁。に。殺。戮。す。  
そ積悪と世の人の知せん。為。他。們。が。其。罪。戾。數。箇。條。を。寫。着。け。り。乱。臣。賊。子。と。後々  
も。懲。まん。と。の。當。意。即。妙。共。六。犬。士。の。所。為。る。と。人。知。れ。濱。の。堂。に。南。魔。の。眞。罰  
る。と。生。推。量。と。考。へ。る。毛。野。道。節。が。復。讎。の。事。と。正月。二。日。り。た。約。莫  
是。の。顛。末。の。酒。家。富。山。在。り。時。神。女。の。示。教。を。と。知。れ。り。有。徳。の。折。六。犬。士。們。と  
豊。の。與。り。あ。る。あ。る。船。虫。が。背。不。寫。れ。文字。を。據。て。木。天。蓼。丸。の。盜。賊。正。可。知。れ。り。と  
船。大。刀。自。の。疑。い。解。け。豊。の。輒。魚。の。江。に。放。され。死。る。と。い。は。る。あ。る。あ。る。是。亦。由。り。又。と。思  
へ。豊。が。必。死。と。救。ひ。單。大。阪。の。と。る。と。信。乃。道。節。莊。介。小。文。吾。現。八。大。角。の。六。犬。士。も。不。用  
意。り。と。帮。助。あ。る。れ。り。そ。中。の。小。文。吾。莊。介。豊。が。義。俠。を。敢。て。忘。れ。折。々。噂。を。ま。り。傳。ふ  
よ。餘。の。四。犬。士。も。越。後。の。然。者。あり。と。知。り。却。小。文。吾。莊。介。片。貝。を。死。を。免。れ。て。他。御  
走。る。と。い。は。る。那。由。元。が。善。小。與。り。誠。心。よ。り。あ。る。と。の。故。の。箇。様。々。と。事。の。崖。略。を。解

示と當時小文五井井介は是等のうも更の告と辭別をせまはると思ひたるありけれども  
多く別を惜むる為め人々知れ其身々々のて死地に入るるを思入稻戸由元と連  
累の害怕めをその意あるも久しき事更の物と思せし其由薄情あり  
那二天士の心術と人柄を見て知る一因て今復思惟る小島義中大阪毛野智が親の  
冤家と云ふる為小磨齒茶と粥鬲を坐敷を師は打粉と湯嶋の社頭ありその折脚を  
邂逅多く更の助命の宿願を果したる幫助となり少ふ今更師弟が使人盡去  
路費の與且大阪大田大川門の環會ふと其と某と賣と相撲の所作と做  
あつ此の河原に在り予の窮死を極れ憶り多き名告逢ひける那と這と其の更相  
似と其趣の極め異之正造化の照對歎と重復と陽の必單立を陰の  
必獨邁と是と物不配偶の事は對心あり孰と主客と處は是義中毛野の主  
人公と脚と更の客と今更が主人公と那時我の客と下と名告逢ひ

より酒家の轉して注し作りぬ更の亦地と易て客あるありと造化の波瀾あり  
とて神出鬼没涯りもるを人見と心屬る好く這滋味と知る者あり共両度の  
奇偶をのべ然と思ふと解示其次園大町の脚と更と注し感嘆と脚論是精  
妙なるかと思ふ知文古夏耳あり鮮なるも易くと殆敬服仕りぬ小可何等の過  
世もて秋親と疎と推並て八個の倭條達然なる愛顧せられ現過分は福ひと  
直にさるるはありありのと有かきといひ亦脚と更も満面坐おら笑れて數あるぬ身も徳  
なるのゆゑに園坐の後より然る秘説さ詳し側聞を仕りぬ傍幸とけりて日  
下より更の憂苦と忘るるもいと憑しと思ひける當下又親兵衛の次園大町向ひ  
七代士のより大既あるけれけ但我這個一路人の他聞の憚りありをのそ  
具の告よりかた然りと我ももるべき時耳ありぬ更脚と更の這人を那里の  
旅客と思へるや更も豫もその名をたりの知る扇谷家の忠義の老黨河

鯉權佐守如の獨子也。河鯉佐太郎孝嗣と唱ふる忠孝盡二の後生は是這人の  
みぞと其れが次國太卿之胆も潰し顔も目成るとその亦思ひくはらるる然方  
様と知らせしと太く無しと仕りぬ籠さるるとち勸解を親兵衛禁めく不その口  
誼の目今之急務あり定賢才子の事成就て又一條の奇談あり始と終と終の  
箇様々々んと守如孝嗣が忠あり且父子兩度の大功も奸黨が醋く思ひる譜ちて  
陥れ事因り孝嗣の今日目前圖也死罪の約れんといける折靈執政木が機変も  
孝嗣を救ひ合より事又那兩個の政木と和奈三們の事又根角合中二們が事親兵  
衛の料もその折行會と那光景と目敷あり孝嗣が死と免と折便直と以武  
藝の本事も試し却意衷と示しと多々友垣と締り事政木執の執龍の做り  
升天奇特のゆきもその崖岩と解示其孝嗣も亦漏れと補て母の慈善と政  
木の恩義且親兵衛と值偶の縁毛野道節們七犬士の忠あり義あり好情あり

わい 悲しいおもひさけ 身の薄命とち不憐れが次國太と卿三の又奇小敬馬に髀と拍て或  
悲しいおもひさけ 怒り我ちち笑む十状萬態みたり禁を膝の杖むと覚ぬまふ  
只顧感しと巴ざりけり且と次國太の親兵衛の向額と衝り却教諭のまもる自他  
得失の所以を兼知はり一か和君の上い有疎函也。今宵猛可上總る館山と  
えへ邁んとも船と這里不意の故とまじりまよひ知むと戰りくまは其頭行事も聞き  
はらひといの親兵衛領た。然るもの他事紛れ解示を暇中づるに御向も既に  
いけり。酒家の七犬士先とち。不慮の里見殿お仕へまると館山の城と預けられ憶  
む邪物の障身あり。館の覚覚始のまじりま七犬士們が在処を定むと送もりて  
東よと。往日猛可遊歴の暇を賜り姑且昔里下總る市河小旅宿とま。今朝  
早天よと立去り。這頭と徘徊あり人开を詳小説くと顔未箇様々々るを  
葛田素藤が謀叛の事且親兵衛が單身あり。館山城へ赴けり素藤と生拘り

入大傳し屏夫二上



廿八

八代傳九郎



文彦堂藏

たろ

次園大

ふま

けつと 徒と 城と 拔れ 事并 素藤 們を 赦免 的事 且 濱路 姫の 鬼病 小 館  
山より 親兵衛 を 召来 せし 姫上の 看病 不 諫め 又 親兵衛 が 所藏 の 靈玉 前  
後 兩度 奇特 的事 伏姫 神の 靈驗 擁護 的事 の 趣を 畧談 是より 後 那地 的事  
酒家 知る 有り 御小 政木 の 忠告 せられ 上總 亦 復 兵乱 あり 料を 知る こと  
ゆり 故に 又 悠々 とも 素藤 の 女僧 妙椿 が 幻術 の 幫助 ありて 館山 の 城を 襲  
了 事 當日 城の 頭人 あり 登桐 山 八郎 生拘 又 田税 戸賀 九郎 と 廿五 屋八郎 郎 辛  
命を 免れ 他 御へ 没落 する 事 其の 故 稻村 ありて 荒川 兵庫 助 清澄 が 君命 を  
稟奉 り 素藤 を 討隊 の 大将 せし 館山 の 城を 攻伐 小 那妙 椿 が 幻術 と 破る 術  
あり 今 全功 せし 妙椿 折る 義成 朝臣 の 靈王 の 奇特 あり 御向 親  
兵衛 を 疑い 怪尼 妙椿 が 反問 の 幻術 あり 怪の 至 怪の 至 怪の 至 伏姫 神の  
示現 あり けれ 十慮 の 一失 を 御後 悔 大 事 快親 兵衛 を 召返 して 妖賊 を

伐夷 び 并 小 自餘 の 七 大士 とも 招 延 聚 合 した 昨日 登崎 照文 と 城 雪 貞 四郎 小  
仰付 られ 隨便 大士 と 招會 の 使 小 連 あり 政本 の 先 媪 が 忠告 の 趣を 情語 示  
す 經 路 次 同 じ あり 使 們 不 逢 とも 素藤 素藤 を 赦免 の 折 我 ち 衆 議 を 折  
束 七 我 君 亦 東 氏 約 束 の 言 あり 快 妖 賊 を 討 滅 且 民 の 倉 庫 炭 を 極 小  
且 館 の 御 心 を 休 め せ 思 ふ 水 路 を 尋 ね あり 故 あり 次 團 太 卿 云  
心 漫 小 勇 れ とも 亦 要 あり 椿 事 願 小 我 們 王 僕 とも 兄 伴 小 召 れ け 加 兄 弟  
助 小 足 とも 空 あり とも 親 兵衛 推 林 あり 志 あり とも 兄 弟  
先 度 我 身 あり 素藤 們 を 成 生 物 あり 今 あり 人 の 幫 助 を 借 ん 然 然 信  
河 鯉 生 あり 我 亦 思 あり 御 小 同 伴 と 鏡 あり 雙 あり 酒 家 と 新 百 識 あり 犬 田  
犬 川 の 舊 識 あり 且 大 阪 あり 再 生 の 因 あり あり 一日 あり 面 會 あり 恩  
謝 徳 あり 答 あり 理 義 を 思 あり 愁 あり 酒 家 小 従 人 と 欲 あり 俠 氣 あり 宜 あり

九 九

志意こころざし大田大川おおのうら門我七個かちしちごの義兄弟ぎけい第千住ちせんぢゆうの驛やきより程遠ほどとほくぬ徳北とくきたの御士水ごしすい  
 垣かき殘のこ五夏いつげ仍なほの宿所しゆくじよ所在そこ必結城かならずむすむすの城下しろしたる。大法師だほふしの草庵くさあん來會きこひあえて  
 本月このつき十六日じゅうろくにちの大法だほふ延のび預あづかりて欲ほする。人ひと叟そう們ら明日あした疾はや徳北とくきたへ仍なほ逢あひ結むす  
 城しろへ赴おもむけ。十六日じゅうろくにちの程ほどもる。論ごんせん次つぎ因よ太眼たいがんを睜みりて。そを宣のたまはる。ことかから  
 大阪おほさか大田おほの大川うら主ぬしの舊ふる恩おん徳とく義ぎを今いまあふ。お忘れわすれぬ。あぬ。おん身みも今日けふ厄やく  
 難がたと極たぎまると。一ひと恩おん義ぎの。今いま會あの太事たいじ小こ俱ぐせられ。後のち小こ自よ餘りの大士たいし達たつ。業わざ  
 とも遅おそ延のびおあ。枉まがて鏡かがみをぬね。口説くちごとけがけ。時ときも程ほどり。短夜たんやる。三さん更まの  
 鐘かね鏝えん々と夢ゆめえけり。登時のぼりとき親おや兵へい衛ゑの邊へら。次つぎ圖ず太たいを推おし禁こめ。雙ふた彼かの那なの鯨くじら  
 音ねの真夜まよひ單ひらる。追風おひて誰たれ何なに船ふね公こう向むか促せまえ。此こゝは是これ甚たる。人ひと且かつ下くだ回まわ解と分わかる。聽きねが  
 人ひとあ。大おほ江え氏うぢの。吸すひ。此こゝは是これ甚たる。人ひと且かつ下くだ回まわ解と分わかる。聽きねが  
 人ひとあ。大おほ江え氏うぢの。吸すひ。此こゝは是これ甚たる。人ひと且かつ下くだ回まわ解と分わかる。聽きねが

南總里見八代傳第九輯卷之十五終

